

特別支援学校の知的障害生徒を対象とした 個別トレーニングによる保健体育の授業実践

常行 泰子¹⁾, 坂井 香代²⁾, 野中 陽一郎¹⁾

1) 高知大学教育学部

2) 高知大学教育学部附属特別支援学校

A Practical Research of the Health and Physical Education through Individual Training for the Students with Intellectual Disabilities in School for Special Needs Education

TSUNEYUKI Yasuko¹⁾, SAKAI Kayo²⁾, NONAKA Yoichiro¹⁾

1) Faculty of Education, Kochi University

2) Special Support School Affiliated with the Faculty of Education, Kochi University

Abstract

The purpose of this study was to identify health and physical education classes by individual training for students with intellectual disabilities in special schools, and to verify the effectiveness of fitness programs and support models in education field. Classes were given to 24 first- to third-year students with intellectual disabilities who were enrolled in the high school of the special support school attached to Kochi University. As a result, the following points were shown; 1) Fitness programs using individual training were effective for students in special schools, promoted understanding of disabilities among undergraduate and graduate students, and recognized learning outcomes through support for exercise and sports. 2) The learning outcomes in the three-way situation of special school students, undergraduate and graduate students, and a learning support model including high school students with disabilities was constructed. Health and physical education classes for students with disabilities are a useful opportunity for lifelong health promotion and active aging, and at the same time, provide a valuable opportunity for teacher training in inclusive education for the formation of a symbiotic society.

Keywords : Individual training, Model of support for students with intellectual disabilities, Special needs education

I. はじめに

インクルーシブ教育システムは、障害の有無に関わらず人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の共生社会を目指している(文部科学省, 2012)。障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶ仕組みづくりにおいて、教員養成課程における特別支援の学習機会は極めて重要であると考えられる。しかしながら特別支援学校における特別支援学校教諭等免許状保有率は平成 30 年の段階で 79.8%と低

く、新規採用者も 76.1%が未取得の状態です。特別支援教育に携わっている現状がある(文部科学省, 2019)。特別支援学級や通級による指導を踏まえ、小・中学校等教員にも特別支援学校免許の取得が奨励されているが、未だ地域社会のニーズに十分対応できていないと難しい。大学改革を踏まえた今後の教員育成については、新たな知識・技能の習得に止まらず、習得した知識・技能を実践・応用する力と

自ら問題の発見・解決に取り組む力を育成することが社会的要請の高い課題と考えられる。今後は、特別支援学校共有等免許状取得率の向上と共に、教科や取得免許の枠に止まらないインクルーシブ教育を含めた人材育成が求められよう。

山口ら (2019) は、知的障害特別支援教育において担当教師が児童生徒の多様な実態を把握し、児童・生徒が安心して関わり合い、協力し合い関係性を育み、自らの力を発揮して学び続ける (自ら学ぶ) 姿を実現するよう、学級づくり・授業づくりに取り組む重要性を指摘している。高知大学教育学部附属特別支援学校高等部では、身体づくりの教育目標として、「(1) スポーツなどの体を動かす楽しみを作り、これまで培ってきた身体運動の力を確かなものにし、卒業後の職場や家庭生活に活かせる力を養う。(2) これまで培ってきた感情の平静を自ら保つ力や支援を求める力を確かなものにし、卒業後の職場や家庭生活に活かせる力を養う」といった2点を掲げている (高知大学教育学部附属特別支援学校, 2020)。この2つの教育目標は、高等部という発達段階の特性に鑑み、卒業後の社会生活との接続までを射程に置いたものとなっている。しかし、こうした教育目標を達成する教育プログラム設計については、現状課題が残されていると考えられる。すなわち、特別支援学校における学校体育から生涯体育へと繋がる教育プログラムの実践・検証は社会的意義が高く、障害を持つ児童・生徒の健康づくりに多大な貢献をするものと期待できる。

こうした現状と社会的意義に鑑み、本研究では就業前段階である特別支援学校高等部の保健体育授業に着目し、卒業後にも各自で継続し得るフィットネスの授業を高知大学と高知大学教育学部附属支援学校が連携して実践する。生涯体育を実践するにあたり、自宅でも個人で行うことができる個別運動 (体操、筋力トレーニング、ストレッチ等) の種目は、集団運動と比して健康維持・増進の観点から近年実施者が増加している。本研究では、ボールストレッチや筋力トレーニング、リズムダンス等を個別トレーニングと定義して授業を実践し、展開する。

またスポーツ庁 (2017) は、「する」「みる」「ささえる」の3つの視点から運動やスポーツ参画人口の拡大を目指し、そのための人材育成・場の充実に関する施策をスポーツ基本計画に基づき推進している。運動・スポーツを実践、あるいは観戦するだけでなく、ボランティアやサポーターとして「ささえる」役割を学習する教育の機会、今後の教員養成において意義が高いと考えられる。特別支援を主とするコース所属の学生はカリキュラム内に多様な教育機会の内容が組み込まれているが、それ以外の教職志望学生は相対的にそのような教育機会が少ないといえるだろう。そこで高知大学学校教育教員養成課程の特別支援教育

コース以外で教員を志望する学部生・院生が、障害を持つ児童・生徒を対象として、運動やスポーツ活動を「ささえる」役割を学習する合同授業を展開する。特別支援学校の保健体育授業に初めて参加するにあたり、特別支援学校生徒を支援するモデルを検討することは、授業改善や今後の効率化、さらに学部生・院生の学習成果を向上させる上で有益な情報をもたらすと期待できる。特別支援学校生徒と教員、高知大学学部生・院生と教員が連携して個別トレーニングによる保健体育の研究授業を行うことで効果的な支援モデルを明示することができる可能性が示唆される。以上のことから、本研究では、特別支援学校の知的障害生徒を対象とした個別トレーニングによる保健体育の授業を実践し、フィットネスプログラムの有効性と支援モデルを検証することを目的とした。

II. 研究方法

(1) 授業対象者

高知大学附属特別支援学校高等部に在籍し、知的障害がある1～3年生24名を対象とした。内訳は下記のとおりである。

- 1年生：男子5名、女子3名
- 2年生：男子6名、女子2名
- 3年生：男子4名、女子3名

(2) 指導日・場所

2020年10月23日 (金) 8:50 - 9:40

高知大学朝倉キャンパス北体育館

(3) 授業のねらい

- ① 保健体育授業において楽しさと喜びを感じるプログラムを体育授業で実践し、有効性を検証する。
- ② 特別支援コース以外に在籍する教職志望の学部生・院生が、特別支援学校生徒と共に学習する支援モデルを検証する。

(4) 研究体制

主たる授業実施者：高知大学教育学部保健体育教育コース教員1名

授業補助者：高知大学特別支援学校教員高等部教員7名 (うち保健体育担当教員2名含む)

授業の支援に係る学部生・院生：高知大学学部生7名 (教育学部1年男子2名・教育学部1年女子4名)、TSPコース学部生1名 (3年男子) 及び高知大学大学院教育学専攻大学院生1名 (1年女子)。

(5) データ収集・分析

授業終了後に、特別支援学校生徒及び教員を対象とした自由記述式の質問紙調査を行い、高知大学学部生・院生を対象とした振り返りを実施した。さらに、特別支援学校教員を対象に、授業終了後の振り返りと今後の要望を尋ねる事後調査を行った。

(6) 調査内容及び項目

個人的属性（学年・性別）及び授業に関する振り返りの自由記述を設定し、授業終了後に特別支援学校生徒と教員及び高知大学の学部生・院生が記入した。

Ⅲ. 結果

(1) プログラムの構成

特別支援学校高等部のねらいとして、「(1) 筋力、持久力、スピード、リラクゼーション、柔軟性など基礎的な身体能力を養い、運動の特性に応じた技能を持つ（知識・技能）。(2) 自己の運動能力や体力などを理解し、長所と短所を発見し、その力を伸ばしたり、課題を達成したりするための方法を先生や友達と考え、判断する。また、それを実践、表現していく力を育てる（思考力・判断力・表現力等）。(3) スポーツに親しみを持たせ、積極的に体を動かす気持ちを養う（学びに向かう力・人間性）」といった3点が、令和2年度高等部体育指導部活動計画で明示されている。指導方針としては、「(1) 個々の実態を把握し、運動能力別にグループを編成する、(2) わかりやすい目標、活動内容を設定し、生徒の主体的な活動、意欲を引き出す、

(3) 各学部の体育（サーキット種目など）再考し、より充実した内容にしていく。また、補助運動についても、より効果的な内容を考えていく、(4) 体力測定にデータをまとめ、分析し、実践に役立てていく、(5) 余暇活動としてのスポーツについても考えていく」といった5点が示されている。すなわち、サーキット・トレーニング形式を用いて持久力や筋力を高める運動については、日々の身体づくりにおいて高等部生徒は既に経験していることがわかる（高知大学教育学部附属特別支援学校, 2020）。そのため本研究では、類似する運動動作かつ新規種目を導入することとした。フィットネスボールを用いたウォーミングアップ（写真1）を行った後、体力における身体的要素として、エネルギー系行動体力のうち「筋力」「敏捷性」、サイバネティクス系行動体力のうち「平衡性」「柔軟性」「調整力」に着目して実施した（写真2）。



写真1 ウォーミングアップの様子



写真2 バランス運動を用いた個別トレーニング

「持久力」については、韓国の人気ユーチューバーが作成し、若年代代を中心にヒットする Hand Clap の曲を利用した自宅で行えるリズムダンスを導入した。防衛体力としては「免疫」「身体的ストレスに対する抵抗力」を重視した。精神的要素としては、行動体力のうち特に「意欲」に着目して、本プログラムを構成した。プログラムは、在宅や近隣環境を利用して個別に実施可能な種目を導入した。

(2) 学習内容と展開方法

特別支援学校生徒のレディネスを高め、十分な楽しさが満喫できる学習内容と展開方法について協議を行い、指導案を作成した（表1）。

(3) 特別支援学校生徒の自由記述（カテゴリー化）

特別支援学校生徒の感想について、自由記述の結果を示す（表2）。内容について分類した結果、「プログラム全体に関する知覚・情動」「具体的動作」「課題」のカテゴリーに集約された。

(3) 高知大学学部生・院生の自由記述

高知大学学部生・院生の自由記述から、生徒との関わりにおける学びや授業評価等について洞察している状況が明らかになった。（原文のまま一部抜粋・記載）

本日、特別支援学校の授業に参加させていただいて、少し汗をかき、自分自身のよい運動になりました。家の中でも一人で手軽にできる運動だったので、時間を作って取り組んでみたいと思います。また、子どもたちが楽しそうに笑っていたのがとても印象的でした。「楽しい?」と聞くと「楽しい!」と言ってくれた子もいて、とても嬉しかったです。はじめは自分から話しかけることに緊張していましたが、運動を通じて打ち解けることができ良かったです。やはり、運動には人と人を繋ぐ力があるのだと感じました。座学だけでなく、こういった交流できる機会があるのなら積極的に参加していきたいと思いました。本日はありがとうございました。（学部1年生女子）

表1 学習活動と展開方法について

	学習活動・内容	指導上の留意点等
事前	課外時間における課題 フィットネスボールを膨らませる	フィットネスボールの空気量は 70%～80%程度。生徒が理解し、実践可能な資料を作成する。
導入 (7分)	1. 導入 挨拶(自己紹介)、授業及び使用ツールの説明	授業担当教員及び学生の自己紹介、授業目標・概要等の説明と確認、ボールの取り扱い方法
展開 (35分)	2. ウォーミングアップ～プレ・トレーニング (15分) 生徒のレディネス(準備性)と楽しさを高める。 ボールを利用した体ほぐしの運動、ボールストレッチ。 全身「調整力」「平衡性」「柔軟性」「敏捷性」の要素を取り入れた低負荷トレーニング 3. メイン・トレーニング (15分) 上半身「調整力」、体幹「筋力」、下半身「筋力」の要素を取り入れた中負荷トレーニング 4. ダンス・トレーニング (5分) 音楽使用: Hand Clap 全身「持久力」の要素を取り入れたリズムダンスによる高負荷トレーニング	初回のため、十分なウォーミングアップの時間を確保する。個別運動に加え、直接接触せずに他者と関わることができる動きを導入する。(写真1) 課外時間に生徒自身が行える種目を展開する。レイヤリング手法による段階的な動きの習得を行う。生徒が無理しすぎないよう指示する(左記4については状況に応じて実施の可否を決める)。必要に応じて、学生はサポートを実施する。(写真2)
まとめ (8分)	5. クールダウン 6. ふりかえり	心拍数の変動に留意する。ふりかえりを行い、印象に残った点や気づいた点を記述する。終了の挨拶
事後	学生によるレポート記述・提出、特別支援学校教員による意見・要望等を尋ねる	授業内容についての意見交換及び今後の授業展開に関する打ち合わせ

特別支援学校では、手に触感が感じられるものや視覚から得られる情報を分かりやすくする工夫を行っているらしいが今回の授業でボールを使う際に独特な触感がするものを使っているなど思った。特支の先生からも僕たち学生に授業が始まる前にボールをどこに売っているのか聞いてきていたのでこういう事は大事なことだと思った。生徒さんたちとのキャッチボールでは投げ方、受け取り方もうまく普段からよく運動していそうだと感じた。(学部1年生男子)

特別支援学校の授業に行くにあたり、これまであまり関わったことのない子たちと接することに少し身構えていた部分があった。しかし実際に接してみると、こんにちは、ありがとうございますといった挨拶もしっかりしてくれて、本当に純粋な子たちなのだろうなと思った。貴重な経験ができてよかった。(TSP コース3年生男子)

難しいと言いながらも楽しそうに、積極的に取り組む姿を見ていいなと思いました。ペア活動をしている時に、始めはやりたくなさそうにしていた生徒も楽しそうに取り組んでくれて嬉しかったです。運動は年齢、性別関係なく

人と楽しく交流できるものだなと改めて感じました。(大学院教育学専攻1年生女子)

特別支援学校の授業に初めて参加しました。初めペアになったときに、どういう風に接すればよいのかわからず緊張しました。しかし、子どもたちが伸び伸びと楽しそうに体を動かしているのを見て、私自身嬉しくなりました。私は高校生の時、障害のある子どもたちがいる施設での秋祭りのボランティアに参加したことがあります。その時に感じたことと、今回授業に参加させてもらって感じたことに共通点があります。それは、座学よりも身体を動かして体験する学びの大切さです。その学びを通して、楽しいという気持ちを持つとともに、成長につながる何かや過程があるように感じました。(教育学部1年生女子)

(4) 特別支援学校教員の自由記述及び事後調査

たのしい雰囲気の中で、かつ、とっても運動ができて心地良い疲労感があります。授業の中で是非取り入れさせていたいただきたいと思いました。今日はどうもありがとうございました。

表2 特別支援学校生徒の自由記述 (n=23)

カテゴリー	自由記述
プログラム全体に対する 知覚・情動 (n=13)	<ul style="list-style-type: none"> ・たのしかったです。またやりたいです。たのしくスイッチ ON OFF(1年男子) ・たのしかったです(1年女子) ・ボールのストレッチたのしかったです(1年女子) ・楽しかった。トレーニングをした(1年男子) ・楽しかった(2年男子) ・おもしろかった(2年男子) ・たのしかったです(2年男子) ・今日は楽しかった。ダイエットダンスきつかった(2年女子) ・たのしかったです(3年男子) ・みんなで楽しくできておもしろかった。もっとやりたい(3年男子) ・つかれました(2年男子) ・もっとやっていました(3年男子) ・たいへんきつかったけど楽しかったです(3年女子)
具体的動作 (n=8)	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールにすわるのがたのしかったです。(1年男子、担当教員代筆) ・キャッチボールが楽しかったです(1年男子) ・むずかしかったです。たのしかったです。ボールのこうかんがたのしかったです(1年男子) ・ボールのストレッチをしてつかれたところもあったけど楽しかったです(1年女子) ・大きめのボールの上に腰かけてはねたり、うつぶせで前後にゆれたりしました(3年女子、担当教員代筆) ・ぼーをともだちとなげるのが楽しかったです。またやりたいです。ありがとうございました(3年女子) ・友だちと一緒に 2 つのボールを投げ合うのをしました。ちょっと難しかったけど楽しかった。ダンスは汗をかきました。またやってください。ありがとうございました(3年男子) ・大学生のおとこ 7 ばんと 2 ばんと 5 ばんの人といっしょにボールなげをしました。ワンバワンバもしました。大学生の 7 ばんと 2 ばんと 5 ばんのおとこが好きです。たのしかったです(男子 2 年)
課題 (n=2)	<ul style="list-style-type: none"> ・おもしろくなかった(2年男子) ・かきたくない(3年)

普段の学習活動では経験できない動作も多く、とても楽しく取り組みました。ありがとうございました。

途中から参加しました。もっとしたかったです。

フィットネスという言葉や身体だけでなく心のリフレッシュという説明に何かを感じている生徒もいたようだ。年齢的なことや障害・環境の影響で心にもやもやしたものを抱えていたり、やる気が起こらなったりする生徒も数名いることもあり、このような活動(身体を動かす、普段とは違う人と関わる、物を媒体にして相手と息を合わせる、難しい運動に挑戦する等)はとても有効だと思いました。(体育担当者)

(5) 特別支援学校生徒との学習における支援モデル
授業実施者と授業補助者、さらに特別支援学校教員を含

めた人材や場の位置づけに関して、授業観察と自由記述及び事後調査に基づき、下記の支援モデル(図1)が構築・検証された。

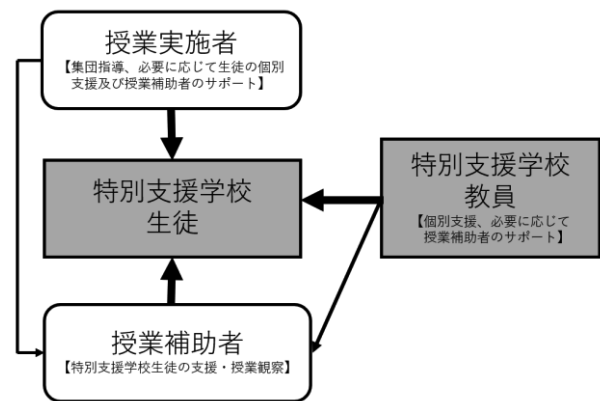


図1 特別支援学校生徒との学習における支援モデル

IV. 考察

本研究では、特別支援学校高等部の保健体育授業に着目し、卒業後にも各自で継続し得るフィットネスの個別トレーニングを大学と教育学部附属支援学校が連携して展開した。フィットネスプログラムと支援モデルの有効性を検証した結果、以下の点が明らかになった。

まず、個別トレーニングを用いたフィットネスプログラムは重度・重複障害のある生徒を含めた授業においても有効であり、教職志望学部生・院生における障害の理解を促進させ、運動・スポーツの支援を通じた学習成果が認められた。本研究では、言語的コミュニケーションが困難な数名の生徒には特別支援学校教員が個別に付き添い、動作の習得や他者との関わりを補助的にサポートする環境があったため、フィットネスプログラムが有効に機能したと推察される。例えば、小さなフィットネスボールを扱うような動作が難しい生徒においては、大きなバランスボールを代替の用具として用いるなど、特別支援学校教員が障害の特性に応じた指導を補助的に行うことで授業がスムーズに進行した。特別支援学校教員との連携体制の重要性は、障害の特性や配慮事項に起因するところが大きいと考えられる。

障害を持つ児童・生徒の発育状況においては、同年代の一般学校の子どもと比較して肥満度の高い点が指摘されている(清水ら, 2017)。授業のメイン・トレーニング(15分)では、座位によるボール上のバランス運動と自体重によるスクワット種目を行い、上半身「調整力」、体幹「筋力」、下半身「筋力」の要素を取り入れた中負荷トレーニングを行った。レイヤリング手法による段階的な動きの習得をねらいとし、生徒が無理しすぎないよう指示を出しながら学部生・院生が必要に応じて支援したが、特別支援学校教員による補助的なサポートが学部生・院生の安心感に繋がったものと推察される。

加地(2009)は、感覚に対して多様に働きかけ、快刺激を提供することで発達が促される点や、適切な指導を行い、今できていることからさらに活動を広げ、技術や楽しみの向上をねらうことの重要性を説いている。本研究では「独特な感触がする」と学部生が指摘したイタリア製のフィットネスボール(株式会社ギムニク)をウォーミングアップで導入した。このボールは、高齢者や女性を対象とした民間スポーツ産業界のフィットネスプログラムでも利用され、指導者の支持を受けているソフトな用具であるが、「たのしかった」と多くの特別支援学校生徒が回答した結果から、障害を持つ生徒にも十分に適用可能であると考えられる。従来、障害児・生徒を対象とした運動・スポーツの機会はリハビリテーションの側面が大きく、医療体育として捉えられてきた経緯があるが、楽しさや生きがいにつなが

るフィットネスプログラムとしてのハイブリッド型授業は、今後の需要増加が見込まれるものと推察される。

次に、特別支援学校生徒と学部生・院生の二者間コミュニケーションではなく、教員を含めた三者状況における学習成果が学部生・院生と教員に示唆され、障害を持つ児童・生徒を含めた学習の支援モデルが構築された。近年増加する発達障害を対象としたソーシャルスキル・トレーニング(Social Skill Training : SST)は、社会生活や人間関係を営んでいくために必要となる力とされるが、教示やモデリング等の技法を通じた学習支援もSSTを向上させる有益な学習内容と考えられている(鈴木, 2020)。障害者を取り巻く国際的な環境は、従来の医学的モデルからより社会的なモデルへと変貌と遂げつつある(Williams et al., 2017)。わが国の政策における方向性として、障害児・生徒をささえる人材育成や場の充実は、教員養成を始めとする高等教育機関において必要性を増す可能性は極めて高い(Isogaki, 2017)。地域や国際社会における障害の理解と支援は、大学における学部生・院生の教育において、重要な意味をもたらすと推察される。

「生徒の特性がわからないから、特支の先生方が一緒に授業に入ってくださいって良かった」という大学院生の振り返りから、障害を持つ生徒をささえる立場として授業に参画する機会は多くないことがわかる。単純な観察やシステム化された授業実践に止まらず、インターンシップとして授業を補助的に支援することや、間接的な指導者の立場で授業を展開する状況が学部生・院生の学習成果を向上させる貴重な機会になる可能性が示唆される。「これまであまり関わったことのない子たちと接することに少し身構えていた部分があった」という障害に対する、ある種の言説を反映した意見も出されており、障害のある生徒と一緒に活動することに対する不安や緊張感等が複数の学部生・院生にみられた。フィットネスやトレーニングにおける楽しさは運動継続の重要な動機づけとなるが、ささえる人材である学部生・院生においても、楽しさを感じながら運動支援・指導ができる事前指導が必要と考えられる。野田ら(2018)は、特別支援学校における受け持ち児とのラボールの形成が健康観察に有益である点を示唆している。特別支援学校生徒との信頼関係を築く前提として、運動支援・指導におけるエンジョイメントについて事前に確認しておくことも、学習成果を向上させる重要な鍵になると推察される。

本研究は、高知大学教育学部附属特別支援学校におけるケーススタディであることから、公立学校等への一般化には限界がある。また、学部生・院生・教員で構成した授業実践であることから、自由記述の解釈や比較には注意が必要となる。

V. まとめ

本研究では、高知大学教育学部附属特別支援学校の知的障害生徒を対象とした個別トレーニングによる保健体育の授業を実践し、フィットネスプログラムの有効性と支援モデルを検証することを目的とした。支援学校生徒と、高知大学学部生・院生及び支援学校を含めた教員の自由記述分析と事後調査を踏まえた結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 個別トレーニングを用いたフィットネスプログラムは特別支援学校高等部生徒に対して有効であり、教職を志望する学部生・院生における障害の理解を促進させ、運動・スポーツの授業支援を通じた学習成果が認められた。
- 2) 特別支援学校生徒と学部生・院生及び教員の三者状況における学習成果が示唆され、障害を持つ生徒を対象とした連携授業における学習の支援モデルが構築された。

障害を持つ生徒を対象とした保健体育授業は、生涯に渡る健康づくりやアクティブエイジングの基盤を築く有益な機会であると同時に、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育における教員養成の貴重な機会を提供するものと期待できる。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP19K11600 及び令和 2 年度高知大学教育学部学部長裁量経費の助成を受けたものである。また、授業研究にご協力いただきました高知大学教育学部附属特別支援学校の先生方に心より御礼申し上げます。

引用・参考文献

- Isogaki K.(2017) Recent Developments in Japan's Special Needs Education – Promoting an Inclusive Education System –. NISE Bulletin. 16.
file:///C:/Users/YQG04/Downloads/07Recent_Policy_and_Status.pdf (2020 年 11 月 30 日閲覧)
- 加地信幸 (2009) 重度・重複障害児を対象としたコミュニケーション支援法に関する実践研究～支援者と共にできる身体運動の実践～. 平成 20 年度広島県立広島特別支援学校研究紀要, pp.22-31.
- 加地信幸・河野喬 (2016) 重度・重複障害児を対象としたアダプテッド・スポーツ教育法改善に関する研究. 社会情報学研究, 21, pp.33-41.
- 高知大学教育学部附属特別支援学校 (2020) ホームページ <http://www.kochi-u.ac.jp/tokushi/overview/index.html#kotoubu> (2020 年 11 月 30 日閲覧)
- 黒岩一雄・大矢隆二・木宮敬信・柳瀬慶子 (2020) 特別支

援学校高等部における知的障害生徒の持久的な体力及び運動経験と就労希望先との関係. 常葉大学教育学部紀要. 40, pp.205-213.

文部科学省 (2012) 中央教育審議会初等中等教育分科会資料 1 特別支援教育の在り方に関する特別委員会報告 1 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325881.htm (2020 年 11 月 30 日閲覧)

文部科学省 (2019) 初等中等教育局特別支援教育課 平成 30 年度特別支援学校教員の特別支援学校教諭等免許状保有状況等調査結果の概要.

https://www.mext.go.jp/content/1414910_01.pdf (2020 年 11 月 30 日閲覧)

野田智子・鎌田尚子 (2019) 肢体不自由特別支援学校担任教諭における児童生徒の健康状態の認識状況 (第二報). 埼玉医科大学看護学科紀要, 12(1), pp.9-16.

清水茂幸・湯沢幸己 (2017) 特別支援学校における健康づくりに関する研究. 岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集. 4, pp.70-73.

スポーツ庁 (2017) スポーツ基本計画.

https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002_300000714.pdf (2020 年 11 月 30 日閲覧)

鈴木和也 (2020) 発達障害のある児童生徒への支援教育の現状と課題について：法的整備の現状も踏まえて. 九州情報大学研究論集. 22, pp.1-11.

Williams M., Pollard E., Langley J., Houghton A.M., Zozimo J.(2017) Models of support for students with disabilities. Higher Education Council for England (HEFCE). pp.1-134.

山口遼・橋本創一・霜田浩信・邊貴裕・熊谷亮・菅野敦・大伴潔・林安紀子・池田一成・小林巖・丹野哲也・杉岡千宏・李受眞 (2019) 知的障害特別支援教育の個に応じた授業づくりに関する全国調査－特別支援学校・特別支援学級における自ら学ぶ姿を育成する授業展開の検討－. 東京学芸大学紀要総合教育科学系Ⅱ. 70, pp.135-142.

